

日々の授業を 子どもたちの未来に

学習指導要領の基本的な考え方の中に「キャリア教育」がキーワードとして示され、キャリア教育の視点を生かした教育課程の見直しが提唱されています。

先生方の大きな負担を伴わずに、キャリア教育を教育課程に組み込むには、どのような手立てをとればよいのでしょうか。本誌の監修でもあり、キャリア教育の専門家である藤田先生にお伺いしました。

先生、どうして○○を勉強しなくちゃいけないの？

子どもたちがこのような疑問を発したとき、先生方はどのように答えたいらっしゃるでしょうか。

学習の内容やそのプロセス自体が楽しいとき、子どもたちは、このような疑問を抱きません。また、「分かったー」という知的興奮が得られる場合にも、このような疑問は生じにくいでしょう。**楽しく、分かりやすい授業展開のための工夫がいかに大切**かは、ここで改めて申し上げるまでもありません。

同時に、**子どもたちの日常生活に**

直結した学習の場合も、子どもたちに「なるほど感」を得させることはそれほど困難なことではないと思います。例えば、こんなケースです。

「今日勉強した漢字の中に『横断』があつたね。みんなは、この標識を見たことがあるかな？ さあ、読んでみよう。」

そう、『おうだんきんし』。これで、また一つ、役に立つ漢字を覚えることができたね。」

でも、学年が進む

に従って、このような展開ができる単元や題材ばかりではなくなるのが現実です。いまひとつ腑に落ちない



顔をしている子どもたちを前にして、

「分かつたかな。ちょっとでも不安だという人は遠慮しないで手を挙げてね。大丈夫かな。はい。みんな分かつたみたいだね。それでは、大切なところを復習してみよう。」

という具合に授業を進めてしまいがちなケースも出てくるでしょう。

そういうとき、休み時間に、「先生、どうして○○を勉強しなくちゃいけないの？」と問われたとします。さて、どう答えましょうか。

「勉強には、無駄なことなんて一つもないんだよ。いつか役に立つときが来る。大きくなればきつと分かるよ。」

私たち大人は、ついこのように応じてしまいがちです。でも実際は、子どもの疑問に正面から答えてはいけません。いつでも、どこでも、誰にでも使える論法で疑問を受け流し、学習意欲を高められるチャンスを見送ってしまっていることに私たち自身が気づく必要があるように思います。

藤田晃之

筑波大学人間系教授
国立教育政策研究所フェロー
前文部科学省生徒指導調査官



今の学びを自分の将来につなぐ方法は多様にある!

現在の学習指導要領が基づいている基本的な考え方や方向性を示した中央教育審議会答申※は、子どもたちの学習意欲をめぐって次のように指摘しています。

「子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に自分の将来との関係や意義が見出せずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られる。」

無論、「学校での学習」と「自分の将来」との関係に気づかせることだけが、学習意欲を高めるための唯一の方策ではありません。けれども、



これまでの小学校教育においては、子どもたちの「今」と「将来」を意識的につなぎ、それを通して学習意欲を高めることに、十分な関心を向けてきたと言いつてもいいと思います。子どもたちが現在取り組んでいる「学習」と「将来」をつなぐ方策は多様にあります。それらは、例えば、次のように示せるでしょう。

- 指導内容に関すること
各教科の中で扱われる単元の内容や題材そのもの
- 指導手法に関すること
学びを促進するための方法(話し合い活動、グループ活動など)
- 学習の習慣やルール



- これからの学習に生かされる
上級学年や中学校・高等学校での学び
- 様々な職業や社会生活に広く生かされる
どのような職についても必要となる知識や技能、家庭を含む日常の社会生活に必要な知識や技能
- 特定の職業に生かされる
職業資格の取得や、特定の職業生活で必要となる知識や技能

子どもたちの視野を「将来」にまで広げ、そこで「今の学び」が生かされていることを伝えることができれば、もっと知りたい、もっと学びたいというさらなる学習への意欲を高めることにもなると思います。

そして、「知」を活用していきいきと活躍する大人の姿を具体的に示すことは、成長することへの期待や大人になることへのあこがれに結び付き、力強い将来展望へと発展していくきっかけともなるのではないのでしょうか。

小学校の先生にこそ、「キャリア教育の視点を日々の授業の中で意識してほしい!」

「今の学びを将来につなぐ」……実は、これこそが、キャリア教育の重要な視点なのです。キャリア教育は教育活動全体を通して行うものと位置付けられています。実際には、社会人をお招きする講演会や、いわゆる「二分の一人式」、中学校訪問などの行事に軸足が置かれがちで、日常的な教科指導の中では実践しにくいという声が聞かれます。

でも本当は、教科を通じたキャリア教育が最も実践しやすいのは小学

校段階なので、なぜなら、

- 教科と教科、教科と道徳・総合的な学習の時間・特別

活動などを相互に関連付けながら今の学びを幅広く将来につなぐうえで、学級担任が全ての学びを見渡しやすいという小学校の強みが最大限に発揮できるからです。

子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもったり、学ぶ意義を認識したりすることを支援するのは、キャリア教育の重要な役割です。そして、その実践は、授業の中のほんの数分間の工夫からスタートさせることができます。本誌「つなぐ」及び連携するウェブサイトに掲載された事例などをきっかけとして、それぞれの先生方の多様な実践が全国各地でなされることを強く願っています。



次号～巻頭言特集

2号：水戸部 修治
国語とキャリア教育

3号：笠井 健一
算数とキャリア教育

4号：村山 哲哉
理科とキャリア教育

5号：澤井 陽介
社会とキャリア教育